

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：山本 圭吾（やまもと けいご）
- (2) 年 齢：46 歳
- (3) 参加事業：第 30 回「東南アジア青年の船」事業（2003 年）
- (4) 職 業：在ドミニカ共和国日本国大使館一等書記官



■ 応募のきっかけ

事業を知ったきっかけは、職場の先輩からの紹介でした。「船内での活動は大変だったが、視野が広がり、非常に良い経験であった」という話を聞き、参加青年としては年齢が高めの 28 歳でしたが、職場の理解もありましたので、応募しました。恥ずかしながら応募するまでは ASEAN のことについては構成 10 か国の記憶も怪しい程の知識しかありませんでした。今日ほどインターネットは普及していない上に、メディアで ASEAN が取り上げられることも多くなかったため、同年代の青年との交流を通して勉強させてもらおう、というくらいの動機でしたが、事業への参加はその後の人生を大きく変える転換点となりました。

■ キャリアパス、スキル向上に特にプラスになったこと

2 点ありまして、コミュニケーション能力の向上と歴史に対する姿勢です。

1 点目、出航の約 1 か月半前に、オリンピックセンターにその年の日本参加青年が集い、各々の役職、テーマ、文化紹介を決める事前準備があるのですが、職業、志望動機、出身いずれも多様で、立場や年齢の違いがあり、さらに各々自分の考えをしっかりと持っている様でしたので、これを一から作り上げて一つのチームにまとめるのは相当な難問だと直感しました。自分は参加青年の中で年齢が高いこともあり、また、この機会にチーム運営を学びたいという考えもありましたので、クラブ活動リーダーに立候補しました。

第一印象の通り、自分の意見をしっかりと持った 40 人の集まりでした。各国のクラブ活動は三つまでとの制限がある中、各々自分が得意とする日本文化の披露とそれらを通じた交流を強く望んでいて、大枠を作るだけでも一晩悩みました。結局どれかを切り捨てるのではなく、「伝統遊び」「太鼓」「茶道」に集約し、「伝統遊び」の中に様々な分野を含んで、その中で時間と場所の折り合いをつけながら各々が自分の得意なことを発信していくことを提案し、受け入れてもらいました。例えば書道の時間には経験者が実演しその他のメンバーはしっかりサポートするといった分業で、それぞれが輝ける瞬間を作ることができました。

また、ASEAN の青年たちと船上で行った、参加各国のクラブリーダーたちとの折衝も刺激的でした。各国三つ、11 か国で 33 個のクラブが同じ時間に船上で活動を行い、メインホールの様な人気スポットも存在する中、その場所決めは熾烈を極めるかと思いきや、各自非常に合理的に解決し、ASEAN の青年たちの合意形成能力の高さに驚いたのを記憶しています。「タイムスケジュールは柔らかい床が必要だから○△サロン」「日本の太鼓は音が響くのでプールサイド」等、合理性からのアプローチで意思決定が行われ、しがらみがないというか、**協力しながらパズルを解いていく様な爽快感**がありました。

しかし、その議論の中、英語が得意でなく、十分に参加できていない青年もいました。その様な青年にも理解してもらえ、図面やジェスチャーを使ったり、簡単な言い回しに変えたり、後で個別にフォローアップしたりということを誰が指示する訳でもなく自然に行っており、誰も取り残さない包摂性も併せて学ぶことができました。

全員が議論に積極的に参加して妥協点を探り、合意に到ればチームは順調に動き出すこと、また、そのための雰囲気づくりが非常に大切であることを、実体験で学ばせていただきました。しっかり意見を持ち、他人と異なるところは妥協点を探していくという作業はそれまでやったことがなかったので良い勉強になりました。本事業に参加するまでは、**大勢で一つのことを実行していくという経験**が殆どありませんでしたので、試練でもありましたが、この経験は**公私の別なく大いに役立っています**。

「協力しながらパズルを解いていく様な爽快感」を下船後のキャリアで感じることはありましたか。

多国間の会議でも同じような経験をしたことがあります。ASEAN と日本の自由貿易協定の会議の場で、各国が予算を獲得するために様々なプロジェクトを提出してきます。ただ、自国の言い分をあくまでも通そうとするのではなく、他の国を助けようとする姿勢が見られるのです。ある国がプレゼンをしている際に行き詰ってしまうと、他の国がヘルプすることもありました。笑顔を絶やさず仲良くお互いに助け合おうというあの雰囲気、皆で協力してより良いものを獲得しようというさわやかな雰囲気は、「東南アジア青年の船」だけではなかったのだと、思ったことを覚えています。



寄港地インドネシアから出発の際、ホストファミリー代表として横浜～フィリピン間乗船されていたマダム・ルシアから寄せ書きをいただく

「大勢で一つのことを実行していく」という経験が役に立った具体的なエピソードがありますか。

意見の違いがケンカに発展することがままある環境で育ちましたので、事前研修の際に日本青年たちが様々な意見を述べ始めた時、誰かと誰かが険悪なムードになるのではないかと思ったものです。しかし、自分の考えをはっきり述べることは建設的な議論に他ならず、激論の後は何のわだかまりもなく、仲良く食事に行ったりしている姿を見て、これはこれまでの自分の中にはなかったコミュニケーションの仕方だと驚嘆しました。それまで職場であまり意見を言うほうではありませんでした。事業参加後は、積極的に話ができるようになっていました。言葉足らずの若い人たちの本心をくみ取って上司に伝えたり、上司の話を解釈して皆にシェアしたりするなど、つなぎ役、盛り上げ役を務めているうちに、非常に風通しよく、一層雰囲気のよいチームになっていきました。

事業参加がキャリアパスの向上にプラスになったことの 2 点目は、歴史・国際社会に対する姿勢が変わったことです。事業が開始された 1974 年当時は、ASEAN 各国の中で、戦時中の日本による占領の記憶が色濃く残り、日本の経済進出による反日ムードがある中での船出であったわけですが、事業に参加する前はそんなことも知りませんでした。ディスカッションで日本の歴史について何も知らないのは恥ずかしいと思い、ASEAN 関連の本を何冊か読み、前知識をつけました。寄港地で訪れた歴史博物館に日本軍に占領された模型があったり、船上のディスカッションでそのような話題に及ぶことがあったりするにつけ、先人達の努力によって日本と ASEAN の友好協力関係が築いてこられたということに想いを馳せ、自分もこれまでの歴史を踏まえ、国際社会に向き合っていかなければならないと強く感じた次第です。

参加以前から英語には関心があり、私費で語学留学をしたり、帰国後も語学学校に通ったりしていましたので、英語でのコミュニケーションには自信があったのですが、この経験を通し、語学は単なるツールであり、それだけでは不十分であると痛感しました。自国の文化や歴史を踏まえて自分の立ち位置を明確にし、他人の意見をよく聞いて議論を進めることが、より良い成果につながるということを学びました。

その他、自分自身のキャリアパスやスキル向上に特に影響を与えたプログラムは、**クラブ活動リーダーとしての経験、ディスカッション、ホームステイ**でした。



ホストファミリーと共に

ホームステイで印象的な出来事がありましたか。

ホームステイはどこの国でも歓迎していただきましたが、特に印象に残っているのはフィリピンです。ホストファミリーが歴史博物館に連れて行ってくださったのですが、展示物の中に日本軍がフィリピンを占領している様子を表した模型がありました。ホストマザーが、あの中にあなたのおじいさまもいるかもしれませんとおっしゃったとき、身につまされるような思いがしました。東南アジアと付き合っていくというのは、単に**交流を楽しむことだけでなく、このような歴史を踏まえつつ進めていかなければならない**ということを教えていただいたと思います。

■ 民間・NPO 等の事業や留学と内閣府事業が異なる点

本事業を日本政府が実施しているということが、「日本はASEAN のことを大事にしている」という強力なメッセージとしてASEAN 側に伝わっていると感じました。特に秋篠宮同妃両殿下への拝謁は参加青年にとっては一生に一度の思い出であり、各国政府にも日本側の想いが伝わっているからこそ、各寄港地で歓迎され、閣僚・首脳レベルの対応をいただいていると思います。各国は本事業を権威あるプログラムと認識しているため、厳格な選考を行い、次世代を担う優秀な人材を投入してきます。参加青年のレベルの高さ及び寄港国の政府高官の話を直接聞くことができることなどは日本の参加青年にも大きなインパクトを与えていると確信しています。

外務省に勤務しておりますと、外国人の既参加青年と出会うことが度々ありますが、彼らは日本に強いシンパシーを抱いており、参加の年は違っても共通体験を通して**一段上の協力的関係**を築くことができます。各参加青年という「点」が交流を通して「線」につながり、各期（バッチ）の参加者が一つの「面」を形成し、数十年の歴史の積み重ねで「立体」となる様な多層的な日・ASEAN 関係が構築されていると感じています。

民間や NPO が主催する事業については見識がなく軽々には違いを論じることはできませんが、各国参加者の質の確保、各国政府の関与によるプログラムの充実度は政府事業でしか実現し得ず、次世代リーダーの育成という意味では、民間や NPO では難しい部分があるのではないかと認識しています。また、毎回 300 名を超える青年が参加する事業規模から得られる**人的資産の蓄積**は他に類を見ないと思われます。

成長著しく、地理的にも近い ASEAN の成長を取り込むには多層的な関係構築が必須であり、同事業は**政府の青少年交流事業の要**として継続すべきかと存じます。

「一段上の協力的関係」とはどのようなものでしょうか。

最近の例ですと、2019 年にアジア・中南米協力フォーラム（FEALAC）第 9 回外相会合がドミニカ共和国で開催されました。大臣級の会合なのですが、タイの大臣に同行されたタイ外務省の高官が SSEAYP の参加青年でした。本来なら、お話しできるような方ではないのですが、お会いするなり、「日本にはお世話になって、若い頃に船に乗ったんですよ」とお声がけいただいたのです。まさか、中南米の会議で SSEAYP の既参加青年にお会いするとは思いませんでした。通常は、初対面の方とはアイスブレイキングから始めるものですが、その段階を飛ばして、最初から「友達」のような感覚で話ができるのは、本当にありがたいことです。

■ 事業参加の経験が現在のキャリアパスに影響を与えた

参加当時は財務省門司税関に所属しており、麻薬や拳銃等の社会悪物品の水際取締りの分野に従事しておりましたが、全国税関英語スピーチコンテストで本事業について、特に上記の様な意識が変わったことについて話し、優勝いたしました。それが関係しているのかはわかりませんが、程なくして財務本省にて、ASEAN 諸国との経済連携協定に携わる部署に勤務させていただくことになりました。自分の担当は協定交渉中のタイ及び協定締結後のシンガポールでしたが、

本件事業の参加青年やホストファミリーとの交流を通して多少なりともその土地の人々の顔が見える様になっていたことは職務遂行の上で大きなプラスとなりました。

また、2010年から2013年の間、外務省アジア大洋州局地域政策課 ASEAN 班にて勤務し、より深く日 ASEAN 関係に関わりました。具体的には日 ASEAN 経済連携協定 (AJCEP) の協力分野 (協力分野の案件申請ガイドライン作成) や ASEAN の経済資料作成を主に行っていました。AJCEP 会合時には各国が案件のプレゼンを行うのですが、そこで本件事業の経験が生まれました。各国の提案プログラムが ASEAN 全体へ裨益するかを勘案し、足りない点があれば提案国に改善を求め、最終的に日本側としての決定を伝える過程では、形式や立場こそ違うものの、船上で経験したコミュニケーションと類似する部分が多々ありました。会合後は打ち解けて一緒に居酒屋に行ったのも良い思い出です。

■「船」事業を継続すべき「今日的意義」

今日では、オンラインでできることが増え、内閣府においてもコロナ禍においてオンラインにより実施されている交流事業があると承知しております。情報共有や意見交換はオンラインでも可能ですが、実生活において全てがオンラインでは完結しないのと同様、**異なる国の青年との共同生活や寄港地活動を通して身に付く肌感覚は対面式の交流でしか得られないもの**であり、インターネットが普及した今日だからこそ対面式交流の効果が高まっていると思われます。既に行われているかもしれませんが、以前船上で行われていた様な準備や折衝をオンラインで実施した上で、対面式の交流につなげていけば、いち早く参加者間の仲間意識が芽生え、より充実したプログラムとなるのではないかと思います。

また、各国参加青年の中にはインフルエンサーも含まれると思われ、SNS の普及により本件事業の対外発信は、より強力なものになっていると思われ、加えて、「船」は**大変見栄えのするコンテンツであり、良好な日 ASEAN 関係の発信に大きく貢献している**と思います。

さらに、前述いたしました、暦年の参加者の多層的なつながりはスポット的な事業では形成され得ません。未来に亘って ASEAN との良好な関係性を築いていくという日本の意志の現れとして、本件事業を継続的に実施することも今日的意義であると確信しています。

■キャリアパスにプラスの影響を与えた寄港地活動



寄港地マレーシアでのウェルカムレセプションにて閣僚御臨席の場で小倉祇園太鼓を披露

寄港地マレーシアにおいて、小倉祇園太鼓を披露させていただいたことは、現在の仕事にもつながる大変良い経験となりました。

日本参加青年だけで集まる事前準備の段階で、九州ゆかりの太鼓を披露するということが決まりました。自分は小倉祇園太鼓が開催される北九州市出身ですが祭りの地域からは外れており、何のつてもありませんでした。しかしながら、小倉祇園太鼓保存会の門を叩き、

事業の意義等を纒々説明してご理解をいただき、約1か月半、仲間と共に特訓を受けて、なんとか形となるものをマレーシアの閣僚御臨席の場で披露できました。この経験はその後、大使館勤務において数々の文化事業を企画立案、実施することに役立っています。**催しを計画し、関係者の理解と協力を得て実現につなげていく**という事業の進め方は大使館の事業においても大きく変わるところはなく、現在のキャリアのベースとなっています。

■ 船を用いた国際交流の意義とは

船の特殊性としては、一度に大勢の青年が参加可能であること、特殊な環境を共有することによる強固な絆の形成、寄港地における話題性の三つが挙げられると思います。

300名を超える大勢の青年が一度に参加し、各国を寄港するという大規模な事業は船以外では困難であると思われます。係る規模の大きさから参加青年の多様性が望まれ、各々が学ぶ点も多くなると思います。

また、船上での生活は日常生活とは異なる特殊な環境であり、移動を伴う共同生活を経ることによって育まれる仲間意識は、1か所で行う交流事業より強固なものになると思われます。

さらに、寄港地では、自国の青年も参加している大規模な交流事業ということであり、また**見栄えのする「船」ということも手伝って、地元紙に大きく取り上げられ、我が国が ASEAN との交流を重視している姿勢を示すのに大きく寄与しています。にっぽん丸という、国名を冠した船**ということもそれに助力していると思われます。



■ 事後活動

現在勤務しているドミニカ共和国は、16年連続で内閣府の「国際社会青年育成」事業（INDEX）の対象国として選定されており、同国内では同窓会組織が立ち上がっている程重要な交流事業として位置付けられています。同事業の応募開始記者会見において自身の経験を語ったり、選考にも携わったりなど、より善い事業成果が得られるよう協力しています。

■ 今も続く事業参加時の国際的・地域的な人的交流

事業参加時の他国参加青年が留学や出張などで日本に訪れた際に、顔を合わせる等の交流が続いています。年に数回程度ですが、彼らを通して参加時の青年が各界で活躍していることを聞き、自らの向上心の助けとしています。

船事業における課題や改善点等についてご意見をお願いします。

学生の参加者と、社会人の参加者とは、グループワークの際の目の付け所にギャップがあったように感じます。学生は、自分がやってきた活動を紹介したいとか、友達を作りたいと考えている人が多かったように思います。他方、社会人は、どうやってチーム作りをするか、どのようにすれば、チームとして成果を出せるのかということを考えていたような気がします。もちろん、学生の中にもチーム作りに興味のある人はいました。しかし、いち早く組織の在り方について考え始めるのは社会人ならではの目線だと思います。ですから、社会人の応募者を増やしたいのであれば、**チーム作りやコミュニケーション等のどの職場でも必要とされるスキルが身に付き、自分のキャリアパスにプラスになる**ということを強調するのがよいのではないのでしょうか。

山本圭吾氏プロフィール

2000年に門司税関入関。船舶の監視取締り、輸出入貨物の検査、徴税、空港での旅客の携帯品取締り、外国税関との情報交換、関税犯則事件の情報収集・発信等に従事。また、財務省関税局にて日・タイ EPA（経済連携協定）交渉、日・シンガポール EPA 見直し交渉等に従事。2007年から2010年にかけて在ボリビア日本国大使館にて、副領事として日系社会との関係構築、邦人保護等を経験。その後外務本省アジア大洋州局地域政策課にて日 ASEAN 経済連携協定協力章、日 ASEAN 友好・協力 40周年等の業務に従事。在モンゴル日本国大使館二等

書記官（広報文化班）を経て在ドミニカ共和国日本国大使館一等書記官として、両国関係の促進に係る広範な業務に従事。